

2023 年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

放射線技術科学科	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者:放射線技術科学科長 村田尚久（大学事務局長）、松永ひとみ（大学事務局部長）、松原奈未（教務課長） 事務局:教務課	
2023 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。 知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度(ルーブリック注1など)を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験(OSCE 注2)で技能や態度の評価が行われます。 また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 臨床実習前能力試験を行った 学内実習ではルーブリックを採用 ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、可否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(セメスター)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(可否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 ☒達成(100%) ☐ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 小テスト、中間試験、ノート提出、イーラーニング、ラーニングボックス、課題提出などを使用して行った ③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。 全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容

	シラバスに適切な評価方法が記載されている 国試模擬試験は全学年で実施した ④各科目の合否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。 GPA は学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したものです が、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 GPA は個人指導に用いた 学内実習では確認試験を行った ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を促します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 ガイダンスや個人面談で指導したができない学生がいた
2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針	①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。 全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 1 年生の学科専門科目から過去問を解かせ国家試験の意識付けを行った ②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ルーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 学生の意識調査を行った ③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続していきます。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 FD の授業評価を参考に改善を行った ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 分担して臨床実習病院を訪問し、得た評価結果を活用した ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。

	☒達成(100%) ☐ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 IR と連携を行っている
--	---

2023 年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

医療栄養学科/医療栄養学専攻	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者: 医療栄養学科長 村田尚久 (大学事務局長)、松永ひとみ (大学事務局部長)、松原奈未 (教務課長) 事務局:教務課	
2023 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度(ルーブリック注1など)を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験(OSCE 注2)で技能や態度の評価が行われます。また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 学修ポートフォリオの活用については、やや遅れ気味であるが、その他は達成している状況。 ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、可否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(セメスター)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(可否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 ☒達成(100%) ☐ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 小テストについては、授業毎ではなく2～3回毎に行われている場合もあるが、その他については達成している。 ③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。 全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。 ☒達成(100%) ☐ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容

	A-Portalにて学生が自分の立ち位置を確認できるようになった。 ④各科目の合否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。 GPAは学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したものです が、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 3年次後期ガイダンス時に確認試験を導入している。なお、本年度3年生より履修要件に入れている。 ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を促します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 PDCA 活動を促してはいるものの活動している学生が少ないのが現状である
2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針	①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。 全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 □達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) ■遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数は 69%であった。本年度よりアチーブメントテストを履修要件に入れ、改善を図っている。 ②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ルーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 □達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) ■遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 評価尺度を用いた評価は、一部科目について行われているが、全学的調査による評価は少ない。 ③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続していきます。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 各教員の各担当授業毎に授業評価を行い、改善を促している ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 アンケートを行い、教育課程の改善につなげている。 ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程

	の改善を図ります。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 これまでのIR分析結果より国家試験合格との関連科目などの強化を図っている。
--	--

2023 年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

臨床検査学科・臨床検査学専攻	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者: 臨床検査学科長・臨床検査学専攻長 村田尚久(大学事務局長)、松永ひとみ(教務課長) 事務局:教務課	
2023 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度(ルーブリック注1など)を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験(OSCE 注2)で技能や態度の評価が行われます。また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 学修ポートフォリオの活用はやや遅れている。知識・思考を確認する試験やレポートに加え、一部の実習では実習においてプレゼンテーションを導入しているほか、レポートの評価などにルーブリック評価を導入している。 2024 年度の OSCE 開講に向けて、2021 年度から OSCE の試行を行っているが、2023 年度は過去 2 回の経験を元に、試験内容を見直し臨床検査技師教育臨地実習ガイドラインも参考に実施要項を見直し、2023 年 11 月 23 日に OSCE を試行した。学習ポートフォリオの活用については、旧教学システム(SUMS-PO)において、学生による 2023 年度学修目標の入力と教員コメントの入力を行った。 ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、可否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(セメスター)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(可否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 模擬試験の裏回答作成は実施、小テストについては教員間に差がある。多くの専門教科において小テストが実施されている。4 年生においては学内模擬試験(各教員が問題を作成)並びに業者模試を実施した。学内模試においては平均点や順位情報を学生に提供し、成績不振者には補講を行うなど成績向上に向けての指導を実施した。2 年生、3 年

	生については、学科独自の学習到達度確認試験(アチーブメントテスト)を後期ガイダンスに実施し、前期定期試験後の夏期休暇中の学修における目標とさせ、休暇中の学修習慣の維持に努めた。 ③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。 全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 補講後試験を実施して上達したかを確認しているが個々の判定にはやや劣る。 毎定期試験後並びに追再試験後に、速やかに学年毎に学生ごとに不合格科目等の成績一覧を作成し、その学期に到達すべき学修がどの程度達成できていないかを教員間で共有した。担任を中心に到達に至らなかった理由などについて面談によって、成績不振の根本原因と対策を検討し特別教育につなげた。 ④各科目の可否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。 GPA は学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したのですが、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 3 年後期に確認試験を実施。 1 年生から 3 年生においては、GPA について 5～6 月に実施した定例面談の際、担任が学生と共有し、今後の学修の方向性を指導する指標とした。特に国家試験出題科目の履修を行う 2 年生においては、国試不合格者と GPA の関係に関する情報を提供し、学修目標と学修意欲向上に役立たせた。4 年生においては 3 年次までの学修到達の指標として認識させ、今後の国試対策に何が必要かを考えさせた。 ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を促します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 自己改善に向けての意識は低いと考えられます。 特に 4 年生に対しては、模擬試験、定期試験後に必ず問題選択肢の正分化(裏回答の作成)を行わせ、さらに正答率から見た自身の回答の正誤を確認するなど試験の分析を行わせることによって、苦手領域や苦手科目を認識させ、学習方法の再検討を行わせた。
2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針	①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。 全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)

	上記達成状況の具体的内容 ストレーツ合格率 85.2%であった。高校訪問、コミュニケーションを養う。教育質保証委員会などにおいてデータを共有した。また、臨床実習説明会や臨床実習報告会などを通して、実習先の技師長などから学生の学力、医療人としての資質などについて意見をいただき OSCE の内容に落とし込んだ。 ②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ルーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 全学的な学修行動調査の意識はやや低いと考えられる。一部の科目においては実習評価にルーブリックを適用している。全学的な学修行動調査や意識調査については、全員が回答するよう指導した。 ③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続していきます。 ☒達成(100%) ☐ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 学生の意見を聞き入れながら改善をしている。 FD 推進委員会からの指導もあり、授業内でのリフレクション入力や授業評価アンケート入力の時間を設けるようにし学資の意見を授業に反映した。 ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 ☒達成(100%) ☐ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 検査健診センター等の施設の講義を実施している。 今後の授業等の方向性に活かしていくよう大学の調査結果を共有した。また、臨床実習説明会や臨床実習報告会などを通して、実習先の技師長などから学生の学力、医療人としての資質などについて意見をもとに学生を指導した。 ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 科学的根拠より国家試験合格授業を実施する。 学力、出欠席等の修学データなどと国試合格との関係、出身校データなど総合的に各データを分析するために IR に分析を依頼した。
--	---

2023 年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

リハビリテーション学科・理学療法学専攻／理学療学科	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者: リハビリテーション学科長・理学療法学専攻長 村田尚久 (大学事務局長)、松永ひとみ (大学事務局部長)、松原奈未 (教務課長) 事務局:教務課	
2023 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度(ルーブリック注1など)を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験(OSCE 注2)で技能や態度の評価が行われます。また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 計画していたプログラムは全て実施できた。しかしアウトカム(次の臨床実習への反映)に改善の余地が残った。 ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、可否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(セメスター)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(可否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 ☒達成(100%) ☐ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 模試等、計画していたプログラムは全て実施できた。 ③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。 全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 計画していたプログラムは全て実施できた。

	④各科目の合否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。 GPA は学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したものです が、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 従来より積極的活用ができています。 ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を促します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 学内、臨床実習においても中間評価として振り返りの機会を全員に設定、実施できた。
2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針	①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。 全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 国家試験合格率は、近隣他校、特に本学より偏差値の高い大学と比較しても遜色ないレベルを維持できている。 ②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ルーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 特に実技実習をともなう科目ではルーブリックを導入している他、学生アンケートの結果を基に改善に努めている。 ③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続していきます。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 学生の授業評価や教員の自己評価に基づき授業の改善を進めている。 ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 学生の就職先機関が臨床実習施設なので、コミュニケーションは密に取れている。社会のニーズを共有する機会を確保できている。 ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)

	上記達成状況の具体的内容 学生の修学状況に応じ、データに基づく指導方針の決定、全体としての問題の分析に活用している。
--	---

2023 年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

リハビリテーション学科・作業療法学専攻	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者: リハビリテーション学科長・作業療法学専攻長 村田尚久 (大学事務局長)、松永ひとみ (大学事務局部長)、松原奈未 (教務課長) 事務局:教務課	
2023 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。 知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度(ルーブリック 注1など)を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験(OSCE 注2)で技能や態度の評価が行われます。 また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 実習科目評価にはプレゼンテーション、実技などを導入して評価用紙を使用して行っています。また、臨床実習前には OSCE を行い、実習前の準備をしています。OSCE では評価尺度を用いて評価し、成績をつけて満たないものには再試験を行います。また、実習後にはセミナー形式で評価形式の評価用紙を用いて、グループに分かれて教員ごとにプレゼンテーションを行い、点数で評価して成績をつけています。この点数は臨床実習の成績に反映させています。 ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、可否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(セメスター)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(可否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 単位認定の評価には小テストやレポートを課すことを採用し、出席日数を点数化し、定期テストには問題の3割を国家試験の過去問を採用しています。その点数を総括的に評価として単位を認定しています。 ③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したかを把握できるようにします。 全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで

	着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 学年ごとに毎年担任、副担任による面談の機会を設けており、GPAの得点、履修状況について学生の相談や指導を行い、現在の学生の進級要件の達成度などを理解させている。 ④各科目の可否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。 GPAは学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したものです。が、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 教育質保証委員会にて GPA の成績を確認し、GPA が低い点数の学生には担任を通して面談を行い指導しています。また、4年生においては GPA の得点を就職活動に利用して、就職の相談を行っています。 ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を促します。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 学生の主体的に学習する態度を生かして、学生自らの勉強会やゼミ活動を促しています。また、各学年にはリーダー、副リーダーを決めて大学祭やオープンキャンパスなど様々な学校行事に取り組むよう指導しています。
2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針	①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 2期生は4年生の進級割合や4年生卒業率も改善した。3期生はさらに4年生進級率も改善しているので、4年間で国家試験ごうかくりつが増加するように指導している。 ②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ルーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 ルーブリックの活用は各担任が学生ごとに行っており、全学的な学習調査も教育質保証委員会にて利用して、他学科・他専攻との比較検討を行っている。また、臨床実習前に意識調査を行い作業療法士としての動機付けを行なっている。

	③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続していきます。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 教員はFD研修会に参加し、継続的に教育課程の改善に努めている。また、日本作業療法士協会が行っている教育に関する委員会には常時参加し、参考にしている。三重県下では協会の理事を2名送っており、作業療法の最新の情報を得ている。三重県の養成校であるユマニテク大学校とは交流を図り、三重県の作業療法士の教育改善に努めている。 ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 卒業生が三重県の病院に就職し、その病院において臨床実習を依頼している。教員は臨床実習の訪問時の聞き取りや専攻で行う調査など利用して教育課程の改善に努めている。 ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 学内の様々なデータを活用して、教育質保証委員会および担任の学生面談において教育課程の改善に努めている。
--	---

2023 年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

医療福祉学科・医療福祉学専攻	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者: 医療福祉学科長・医療福祉学専攻長 村田尚久（大学事務局長）、松永ひとみ（大学事務局部長）、松原奈未（教務課長） 事務局:教務課	
2023 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。 知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度（ルーブリック 注1など）を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験（OSCE 注2）で技能や態度の評価が行われます。 また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 個々の学生が学修成果、試験結果、実習評価等について自らが把握し、改善への取り組みを続けている。また、担任教員が面談することにより気づきのチャンスを与え、前向きに取り組ませている。 ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、可否（単位認定）を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期（セメスター）修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価（可否の判定）に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 学習評価について、一定の水準に到達しない場合は繰り返しの指導により到達点に至るまで、根気強く指導援助を継続するスタイルを徹底している。一方で学外実習については施設、事務所、機関等からの評価については一定以下の低評価については、評価に問い合わせるとともに担当教員が懇切に説明し、次年度再度受講の機会を与えることとしている。 ③各段階において学生が「何ができるようになったか」（アウトカム）を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。 全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において

	て、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 4月の段階で担任教員が各学生と面談をし、現在のGPA得点の確認をし、自己の立ち位置の再確認をしてもらっている。同時に前年度の学修状況の自己分析を求め、反省すべき点は反省を促し、今期の取り組みについて確認することとしている。 ④各科目の可否の判定(単位認定)に加えてGPA注3による評価を活用します。 GPAは学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したものです。が、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 GPA得点については、折に触れ(前期・後期の履修登録の折)の他に定期的な面談時に活用しつつ、国家試験受験の判断基準としても活用をしている。 ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA活動注4)を促します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 3・4年生の場合、国家試験の学内外模試の判定結果をもとにPDCAサイクルを意識した取り組みが可能となっている。
2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針	①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合やGPAの他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。 全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 入学者が定員の7割程度となる現状があり、その分少人数教育の強みとしての細部にわたる指導援助ができており、休退学者が殆どいない。また、国家試験への取り組みも各教員が熱心に指導できる環境下であり、国家試験合格者が全国平均を下回ることはない。 ②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ルーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 ほぼすべての教員がラーニングボックスを活用して、学生の学修支援に努めることを実施している。また、講義終了時にリアクションペーパーを提出してもらうことが習慣付けられており、適宜学修に関する調査の代わりとなって機能している。 ③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善(FD注5活動)を不断に継続していきます。

	□達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 上記②で説明した通り、講義や演習場面での受講する学生から意見や要望、改善すべき点などを具に聞きとる作業をしている。また、オフィス・アワーを有効に生かす努力を話し合いながら進めている。 ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 児童相談所、社会福祉協議会、児童館、高齢者施設などに勤務する卒業生を定期的に招いて現場の実情に即した内容について適宜話してもらう機会を設けている。実習前には処遇困難事例の紹介など有意義な時間となっている。 ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 UPIフォローアップ調査、GPA 得点、国試模試などのデータを専攻内で共有し、一人の不適應者も出さないように前向きに取り組んでいる。昨年は残念ながら1名の退学者が出た。休学者は0である。
--	---

2023 年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

医療福祉学科・臨床心理学専攻	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者:医療福祉学科・臨床心理学専攻長 村田尚久（大学事務局長）、松永ひとみ（大学事務局部長）、松原奈未（教務課長） 事務局:教務課	
2023 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。 知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度（ルーブリック 注1など）を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験（OSCE 注2）で技能や態度の評価が行われます。 また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 ルーブリックは科目によって導入しており、講義科目では知識・思考を確認するためレポート、小テスト、発表を組み合わせています。また技能や態度についても、ディスカッションや発表に即して総合的な評価を行っています。 ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、可否（単位認定）を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期（セメスター）修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価（可否の判定）に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 講義・演習等では小テストを挟んだり、リフレクションシートへの回答を求めたりすることを通して、学修が期待される水準に到達できているかを確認し、かつフィードバックを行った上で、最終試験での総括的評価に至っています。また、学習意欲の乏しい学生には講義担当教員をはじめ、学年担当教員あるいはゼミ担当教員が個別に指導を行っています。 ③各段階において学生が「何ができるようになったか」（アウトカム）を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。 全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において

	て、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 1年生でチーム医療、基礎心理学を修め、2年生では臨床心理学の基礎を学修させます。そして3・4年生では実践的な心理学を学修するカリキュラムとしています。1・2年生で人の心の仕組みについて一般的な法則に関する知識や検討する姿勢を身につけます。その上で、実践的な心理学については、2年生の心理実習Ⅰで実習施設指導者からの講義を受け、心理専門職としての態度を身につけます。3年生の心理実習Ⅱではコミュニケーションスキルを高める体験が含まれます。4年生の心理実習Ⅲでは、実際に現場に出て、高い倫理意識や臨床的態度を常に心がけて実習に赴きます。このように、知識や実践能力に関わる自分の立ち位置を把握することができるようカリキュラムを設定しています。 ④各科目の可否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。 GPA は学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したのですが、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 臨床心理学専攻の場合は、修士課程に進学して国家資格である公認心理師の受験資格が得られます。大学院進学 of 学修レベルに到達しているかという指標として GPA を活用しつつ進学の指導をしています。 ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を促します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 小テストの結果のフィードバックや、レポート・卒業論文の指導、心理実習の事前・事後指導を通して、学生には学修行動を振り返るよう促しています。特に卒業論文では、研究計画を立て(P)、実際に調査・分析・執筆を行います(D)。この研究を通して論理的な思考や研究スタイルにどのような問題が存在していたのかを本人自身の批判的思考や指導教員の指摘を通して得て(C)、今後の進路・人生の糧とする(A)という、大きな循環を意識した指導を継続して行っています。
2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針	①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 臨床心理学専攻では修士課程修了時期に国家試験を、また修了半年後資格試験を受験することになりますので、国家試験対策に成績を活用することはありません。ただし、大学院進学希望者には、3 年次のゼミ指導において GPA を考慮に入れた個別指導を行っています。 ②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ルーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意

	識調査により評価します。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 卒業時に実施する学修行動調査、大学生活における学生意識調査の結果を参考にしています。 ③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続していきます。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 学生の授業評価を取り入れ次年度に改善するよう、各教員が積極的に取り組んでいます。 ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 臨床心理学専攻卒業生は一般企業にも就職していますが、その就職先機関との連携は不足しています。しかしながら、福祉関連企業や教育関連企業をはじめ、公務員や教員、医療機関の職員となった卒業生・修了生から就職情報などを得られるネットワークは広がってきています。卒業生や修了生との関係を密にすることを通して、就職先との関係構築を図っているところです。 ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 IR推進委員会で示された情報を教員間で共有し、教員各自が担当講義において反映させています。
--	---

2023 年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

鍼灸サイエンス学科	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者: 鍼灸サイエンス学科長 村田尚久 (大学事務局長)、松永ひとみ (大学事務局部長)、松原奈未 (教務課長) 事務局:教務課	
2023 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。 知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度(ルーブリック 注1など)を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験(OSCE 注2)で技能や態度の評価が行われます。 また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 知識や思考力の評価方法は試験、技能や態度についてはプレゼンテーション・実技・実習などを観察し、適切な評価尺度を用いる評価方法を活用しています。評価尺度については、事前に説明し、その学習方法について個別に面談しています。 ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、可否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(セメスター)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(可否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 ☒達成(100%) ☐ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 形成的評価については、国家試験および最終的総括評価(可否の判定)の2つを重点的に強化しています。国家試験は、学生の習熟度に合わせた実力テスト・模擬テストを底上げを目的として提供しています。総合評価は、必要な水準に達成できるまで、繰り返し実施しています。 ③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。 全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において

	て、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 実技・実習科目では、達成度に応じた段階的な教育と評価を行っています。達成状況に遅れのある学生には、個の習熟度に応じた評価を実施しています。講義科目は講義中の段階的評価は行っていないが、面談によって目標達成への学生の立ち位置を把握しています。全科目において、定期試験後、成績不良者に対して再度、段階的かつ反復した学習と評価（トコトン教育）を行いながら、目標達成に向けて関わりを持つ指導を徹底しています。 ④各科目の可否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。 GPA は学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したのですが、進級・卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 個別および三者面談時の指導において、進級・卒業・国家試験合格の目安として活用しています。 ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を促します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 成績不良の程度によって個別面談を増やし、学生の日常の取り組み状態を把握しながら、自己改善に結びつける活動を促しています。また教育支援者へも報告して、改善に結びつけるための協力をお願いしています。
2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針	①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 2023 年度国家試験 入学者数のストレート合格率は、はり師、きゅう師ともに 73.7%であった。この期は入学者 38 名中、退学者 4 名、留年者（休学者を含む）4 名であった。2022 年度ストレート合格率は、はり師 70.6%、きゅう師 76.5%で、はり師合格率が向上した。 ②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ルーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 教育効果を高めるために、学科評価と全学的調査を含めて、評価指導しています。 ③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生

	の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続していきます。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 学科会議及び教育質保証委員会において、学生動態を共有しながら教育質を検討しています。また学生の授業評価に基づき、担当教員の教育改善を継続してます。 ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 客観的評価はないが、口答による主観的評価や意見を聴取して、教育課程の向上に生かしています。 ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 IR での分析結果に基づき、国家試験対策や教育課程の改善に取り組んでいます。
--	--

2023 年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

救急救命学科	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者:救急救命学科長 村田尚久（大学事務局長）、松永ひとみ（大学事務局部長）、松原奈未（教務課長） 事務局:教務課	
2023 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。 知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度（ルーブリック 注1など）を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験（OSCE 注2）で技能や態度の評価が行われます。 また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 試験を点数で採点している。実技については、ルーブリックを用い、評価による差が出ないようにしている。 ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、可否（単位認定）を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期（セメスター）修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価（可否の判定）に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 ☒達成(100%) ☐ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 小テストを行い、返却している ③各段階において学生が「何ができるようになったか」（アウトカム）を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。 全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置（マイルストーン）を把握できるようにします。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 実習において、毎回、達成するまで行っている。

	④各科目の合否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。 GPA は学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したものです が、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 グループ分けの資料にしている ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を促します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 学生への記入を促している
2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針	①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。 全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 □達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 卒業生未のため、評価できず ②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ルブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 選択科目の成績を確認している ③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続していきます。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 振り返りのアンケートに答えてもらうようしている。 ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 □達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 卒業生未のため、評価できず ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。 □達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) ■遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 科学的根拠そのものが難しい問題であるが、変更、修正は行っている。

2023 年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

臨床工学科	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者:臨床工学科長 村田尚久(大学事務局長)、松永ひとみ(大学事務局部長)、松原奈未(教務課長) 事務局:教務課	
2023 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。 知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度(ルーブリック 注1など)を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験(OSCE 注2)で技能や態度の評価が行われます。 また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 ☐達成(100%) ☐ほぼ達成(実行中・80%) ☒遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 知識と思考力の評価は、定期試験とレポートで行っており、技能や態度の評価は、「生体機能代行装置学実習」で、口頭試問および実技試験の評価にルーブリックを用いている。 学生自らが行う学修ポートフォリオの活用はできていないが、A-portal を用いた活用について検討を行っている。 ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、可否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(セメスター)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(可否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 ☒達成(100%) ☐ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 講義中に小テストを実施し、講義中の重要なポイントと定期試験までに到達しなければならない水準を把握できるようにしている。 また、4年次には、国家試験の模擬試験を毎月1回以上行い、試験ごとの採点結果を学生に配布して苦手分野の把握、国家試験合格までの到達度を把握できるようにしている。 ③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。 全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで

	着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 シラバスに講義の各回における到達目標が記載されており、授業終了時、または、科目終了時に「何ができるようになったか」が確認できるようにになっている。 ④各科目の可否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。 GPA は学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したものです。が、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 2 年次後期の学修指導、4 年次の国家試験対策でのクラス分けに GPA を活用している。また、各学年の前期と後期に定期面談を実施しており、単位の修得状況と GPA を併せた修学指導を行っている。 ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を促します。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 担任教員と学生との面談時に、各学年担任が成績(GPA)をもとに学修指導を行い、これまでの学修行動の振り返りを促している。 振り返りから得られた知見から、今後の学修計画を立ててもらい、必要に応じて、基礎力向上のために開講されている選択科目の履修を勧めることで、学修行動の改善を行っている。
2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針	①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。 全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 入学者数あたりの合格者数は学科内で共有され、この数字をもとに、次年度の学習指導方法の改善を行っている。 ②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ルーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 学修行動調査や意識調査の結果は学科内で共有され、技能や態度の教育効果の評価に活用されている。 ③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続していきます。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)

	上記達成状況の具体的内容 学生授業評価を各教員が確認し、授業評価の結果をもとにシラバスに改善案を記載するなど、教育方法の改善を継続して行っている。 ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 卒業生に対するアンケート調査および本学卒業生に関するアンケートの結果を学科教員で共有し、教育課程の改善に活用している。 ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。 ☒達成(100%) ☐ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 IR 推進室から提供されるデータに加え、学科内でデータ集積を行い、このデータを活用した教育方法の改善は常に行っている。各学年のGPAを分析することで、学年ごと、さらには学生ごとに合わせた国家試験対策を行っている。
--	---

2023 年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

医療健康データサイエンス学科/医用情報工学科	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者: 教務・教育改革担当副学長 分担者: 医療健康データサイエンス学科長/医用情報工学科長 村田尚久 (大学事務局長)、松永ひとみ (大学事務局部長)、松原奈未 (教務課長) 事務局: 教務課	
2023 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。 知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度(ルーブリック 注1など)を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験(OSCE 注2)で技能や態度の評価が行われます。 また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 ・成績評価方法は授業科目ごとに、授業担当者が効果的な評価方法を工夫し、期末試験だけでない評価方法を使用している。 ・知識や思考力の評価方法にeラーニングシステム(learningBOX、A-Portal)を使用し、授業ごとの小テストへの回答、レポート提出などを実施し、期末試験だけでない評価方法を行っている。 ・技能を取得する授業では、学生がスライドを作成し、グループ学習により内容を検討し、発表会ではプレゼンテーションをしてもらっている。評価方法は、評価項目ごとの基準を学生に示し、学生による投票結果を使用している。また優秀学生に対して、表彰状を渡し、学修の動機付けを促し、学生の投票結果を成績に反映させるなどの工夫を行っている。 ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、可否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(セメスター)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(可否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 ほとんどの授業で、eラーニングシステム(learningBOX、A-Portal)を使用し、授業回または教科書の章ごとのクイズ・小テストへの回答、レポートの提出などを行い、理解が不十分な内容については繰返し学修させ、形成的評価を行っている。

	③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。 全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 各授業のシラバスに最終的な目標を明記し、授業ごとに獲得できる能力を明記し、学生が自分の水準を把握できるように工夫している。また検定試験がある教科では、外部の検定試験を活用し、水準を確認できるように工夫している。 ④各科目の合否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。 GPA は学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したものです。が、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 ・GPA の低い学生に対して、クラス担任が個別に面談を実施しており、学修方法などの相談に使用している。 ・GPA により、卒業研究の研究室配属を決め、卒業時には、GPAと諸活動を総合的に判断し、学業優秀者を選定している。 ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を促します。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 新入生オリエンテーション、前期と後期の在学生ガイダンスで、学生が自らの学習行動を振り返り、行動計画と目標を立てさせるために、全学生に「将来設計と生活時間 PDCA シート」(Excel ファイル)を提出させ、自己の改善を促す仕組みを構築し、実施している。
2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針	①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 ・本学科では、多様な目的意識で入学してきており、多数の国家試験・認定試験に対応した授業を実施している。その結果、「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの資格取得数」は、1.92 であり、ほとんどの学生(2024 年 3 月卒業)は、複数個の国家試験・認定試験に合格して卒業している。また本学科は比較対象となる学科が存在しないため、比較は難しい。 ②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ルーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。

	□達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 技能や態度への教育効果を計測するために、全学で実施している学修行動調査や意識調査に協力している。 ③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続していきます。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 ・学生の評価や教員の自己評価は、全学の評価方法を使用し、学科長が評価結果を確認している。 ・教育改善を積極的に行うために、FD 講演会・LMS 研究会に出席するだけでなく、LMS 研究会の講師を担当させていただいている。またこれらの講演内容に関して、学科会議で審議を行っている。 ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 学生の就職先へのアンケート結果とインタビュー結果により、コミュニケーション能力の向上を要望している就職先が多かったので、グループワークを含んだ PBL 授業を増加させている。 ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 学科長がIR推進室のメンバーとなり、IR活動に協力し、IR 推進室会議の結果を学科会議で説明し、学科の構成員と情報共有している。
--	--

2023 年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

薬学科	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者: 薬学科長 村田尚久 (大学事務局長)、松永ひとみ (大学事務局部長)、松原奈未 (教務課長) 事務局:教務課	
2023 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。 知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度(ルーブリック 注1など)を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験(OSCE 注2)で技能や態度の評価が行われます。 また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 各授業にて、ルーブリック評価法などを用いるなど適切な評価を実施しており、また、OSCE、事前実習などで薬剤師としての技能や態度をしっかりと学んでいます。薬学部では、薬学教育評価機構による第三者評価を受審して十分に対応しているため、適切な対応となっていると考えております。 ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、可否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(セメスター)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(可否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 各科目に関して、各授業シラバスにおいて単位認定評価における「形成的評価」と「総括的評価」を明記した上で、それに準じて授業を実施していただいております。 ③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。 全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最

	最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 各授業担当者がシラバス上に学生が何ができるようになるかを学生主体で示しており、それに準じて授業を実施しております。 ④各科目の可否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。 GPA は学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したのですが、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 GPA については保護者にもしっかりと内容をご理解いただくように面談時等に説明しております。また、3年次修了時点で専門科目の GPA が 2.0 未満の学生は 4 年次の共用試験の合格が厳しい傾向にあるため、3 者面談(学生、保護者、担任教員)を実施しております。 ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を促します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 重要な試験などの成績開示時には担任との面談を実施して、学生が学習行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動を促す機会を作っております。
2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針	①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。 全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 □達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) ■遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 目標値に向けて 6 年次学生および教員が努力を進めてきました。しかしながら本年度は、本格的な相対評価の導入により本学にとって厳しい合格基準となっております。加えて国家試験問題の想定範囲を超えた難化に対応できず、46.3% (昨年度: 56.9%) のストレート合格率となってしまいました。 ②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ルーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 上記の概念で教育を進めております。また、学生の学習などに関係すると考えられる事項については、周囲の情報も含めて、担任を中心として情報を共有化するようにしております。 ③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続していきます。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)

	上記達成状況の具体的内容 学生の授業評価については、できる限り時間を設けて評価させるように促しております。また、FD 研修への参加など、教員の教育に対する自己研鑽も不断に継続されております。 ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 同窓会や学生交流会などで卒業生の体験談など OB との交流の機会を広く設けてきました。昨年度は6年生に対して複数回 OB による国家試験 の体験談を披露する会も設けられ、参加学生を対象としたアンケート調査においては高評価を得ております。 ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 IR 委員より種々のデータをいただき、学部長、学科長、薬学教育センターにて解析し、学生の教育に活用しております。
--	--

2023 年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

看護学科	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者: 看護学科長 村田尚久（大学事務局長）、松永ひとみ（大学事務局部長）松原奈未（教務課長） 事務局:教務課	
2023 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度（ルーブリック注1など）を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験（OSCE 注2）で技能や態度の評価が行われます。また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 試験やレポートに加え、グループワークでの学びをプレゼンテーションおよびディスカッションを通して自身の思考を論理的にまとめる力を評価している。技能や態度については、学内演習・臨地実習での達成状況を観察し評価するとともに、適切な評価尺度（ルーブリック 注1など）を用いた評価方法を活用している。 ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、可否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(セメスター)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(可否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 ほぼ全科目で小テストや課題レポートによる形成評価を行っている。learningBox の活用も増加している。具体的には、看護技術等については学生が具体的なイメージができるように自分の時間でlearningBoxにある映像教材を確認したり、毎回の授業ごとに小テストを実施している科目もある。 さらに国家試験のための模擬テストは各学年の学修進度に合わせ実施している。特に最終学年の4年次は複数回実施している。 ③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにし

	ます。 全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 各科目で実施している小テストや事後課題による形成評価の結果は、適時学生にフィードバックし、科目の目標に到達するための支援に活用されている。learningBox の活用も増加し、毎回の授業ごとに小テストを実施している科目もあり、その都度、知識修得の到達度を学生自身が把握できるようにし、科目の目標に到達するための支援に活用している。定期試験後の解説、再試験後の特別教育においては、学生の傾向を把握しながら修得度に応じた指導を繰り返し行っている。 ④各科目の可否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。 GPA は学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したのですが、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 看護学科では、前期・後期セメスターのスタート時に定期的に担当教員が面談を行っている。特に年度末の GPA が 2.0 未満の学生には、生活リズムや学習方法の振り返りと今後の学習計画指導を行っている。加えて早期からの対応が必要な GPA2.0 未満の成績不振の場合、1 年次から保護者との 3 者面談を行い、状況の認識を共有するとともに、国家試験に向けた学習計画と家族の協力を得られるよう説明を行っている。 GPA と欠席日数は関係性が強いと、欠席が多い学生、課題レポートが未提出・期日が守れない学生については、科目担当教員と学生担当教員が情報共有して、学生指導に当たっている。 4 年次からはゼミ担当教員が卒業研究指導とともに国試対策の模擬試験の結果も含め成績不振の学生に対して定期的に学習指導を行っている。 ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を促します。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 前期スタート時に A-potal を活用して前年度の振り返りと新たな 1 年間の学修目標と具体的な行動計画を記載するように指導している。担当教員は前・後期セメスター開始時に、担当学生とその内容を踏まえながら面談し、PDCA 活動につながる支援を行っている。さらに学生サポート記録に記載し、教員間で情報共有ができるようにしている。
2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針	①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。 全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)

	上記達成状況の具体的内容 模擬試験の成績については学生委員会を中心に分析し、担当教員と連携しながら学習支援に役立てている。2023 年度卒業生の看護師国家試験合格率 100% (97 名中 97 名合格) 昨年不合格の既卒者 1 名も合格であった。保健師国家試験合格率は 100% (30 名) であった。対入学者あたりの看護師国家試験合格率は 89.6% であり、目標の 90% をほぼ達成している。 ②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ルーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 全学的な学修行動調査や意識調査により、夜間のアルバイトやゲームやYouTube 等による夜型生活が学生の出席率や成績に影響していることから、1 年次の早期から学生の面談でこれらについて把握し、担当教員を中心に対応していている。 ③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続していきます。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 学生の授業評価と教員の自己評価は毎年実施しており、学生の評価を授業に取り入れるとともに、教員の自己研鑽のための FD の定期開催を実施している。看護学科FD では2023 年度は「看護学実習の現場体験から学生の学びや思考を深める指導者の役割と方法」というテーマで外部講師による講演会を実施し、実習施設の看護職にも Zoom で参加の機会を設けた。 ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 毎年、実施されている卒業時の学生への教育評価アンケート結果は、学科内の教員で共有し、教育課程の改善に活かしている。 ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。 ☐達成(100%) ☐ほぼ達成(実行中・80%) ☒遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 留年学生の成績や国家試験結果と 1 年次からの成績を IR と連携し分析しているが、十分な活用できていないので、活用方法について教務委員会、教育質保証委員会を中心に検討していく。特に学生の読解力については課題が多いことを看護学科教員間で共有しており、2024 年度からはリメディアル教育に国語(読解力)を導入し、早期から対応するとともにその成果についても検討していきたいと考えている。
--	--